

研究ノート

ヘミングウェイの文体論研究
and の使用頻度を中心に

田 中 誠

要 旨

ヘミングウェイの簡潔な文体は、様々な要素が絡み合って構成されていると考えられるが、その中でも、この稿では and の使用頻度に注目をする。ヘミングウェイが and を多用しているという印象は多くの人を感じていることであると思うが、and の使用頻度は本当にヘミングウェイの作品の中で、統計的に見ても多いと言えるのか、また、最初の頃の作品と、晩年の作品では、and の使用頻度に違いはあるのかの調査を試みることにした。

コーパス作成のために選んだ作品は、*The Sun Also Rises* と *The Old Man and the Sea* である。また、比較のために「小学館コーパスネットワーク」の WordbanksOnline を使用し、その中の and の使用頻度を調べた。

結果として、WordbanksOnline と比較して、ヘミングウェイ作品中の and の使用頻度は、統計的に見ても高いということが分かった。また *The Sun Also Rises* と *The Old Man and the Sea* では、後者の方がさらに、and の使用頻度が高いということが分かった。上記のヘミングウェイ作品においては、他の単語と比べても and の使用頻度は高いということが分かった。

キーワード

ヘミングウェイ、ハードボイルド・スタイル、コーパス、and の使用頻度

1. はじめに

ヘミングウェイの文体論研究は、その独特なスタイルの故に、多くの研究者を惹きつけてきた。筆者も、ヘミングウェイの小説を読む際には、その独特のスタイルに魅了されるものの一人である。いわゆるヘミングウェイのハードボイルド・スタイルに惹きつけられるのかもしれない。あの簡潔な文体は、様々な要素が絡み合って構成されていると考えられるが、その中でも、この稿では and の使用頻度に注目したい。and という語を使用することにより、単語と単語、文と文などを淡々とつないでいくという手段を用いて、文章を綴っていく。このようにヘミングウェイが and を多用しているという印象は多くの人を感じていることであると思う¹⁾。

しかし、and の使用頻度は本当にヘミングウェイの作品の中で、統計的に見ても多いと言えるのであろうか、あるいは、最初の頃の作品と、晩年の作品では、and の使用頻度に違いはあるのであろうか。この疑問に答えを出してみたいと思い調査を試みることにした。

2. 手 順

まず、ヘミングウェイの作品をコンピュータ処理できるように、パーソナルコーパスを作成することにした。選んだ作品は、*The Sun Also Rises* と *The Old Man and the Sea* である。*The Sun Also Rises* は、ヘミングウェイ初の長編小説であり、初期のヘミングウェイの文体特徴を捉えることが可能ではないかという観点から選択した。*The Old Man and the Sea* は、晩年の作品

で、ヘミングウェイの小説の特徴である非常に簡潔な文体で知られている作品であるし、*The Sun Also Rises* と比較することで、初期の作品と晩年の作品との対比もできるという観点から選択した。また、*The Old Man and the Sea* に関して、ヘミングウェイ自身もタイム誌 (Sept. 8, 1952) に次のように述べている。「ぼくは、この作品を二百回以上読んだ。読むたびにぼくは何か感じた。これまで生涯求めてきたものを遂に得たようだ」(今村 1979, p. 180 より引用)。つまり、この作品は、ヘミングウェイの本当に練りに練った一作と言えることも選択理由の一つである。

コーパス作成に使用した版は以下の通りである。

Hemingway, Earnest (1926) *The Sun Also Rises*. (First Scribner Ebook Edition, 2002)

Hemingway, Earnest (1952) *The Old Man and the Sea*. (First Scribner Ebook Edition, 2002)

上記の作品はEbook EditionのためPDFファイルなので、このままでは、コーパスを作成することができない。そこで、「読ん de!! ココ ver.11」というソフトの「画面から取り込む」というコマンドを使用して、PDF ファイルの文章を文字化したテキストに変換した。

その後、「読ん de!! ココ ver.11」には、1行ずつ変換したテキストを目視で確認する機能がついているので、そちらで1行ずつ自分の目でチェックしながら、誤った文字変換がないかの

確認をし、確認済みのものを「ワード」に貼り付けた。そして、「ワード」の文章校正機能を使用し、スペリング等のチェックをもう一度行い、目視確認もして、できるだけ正確なテキストの作成を目指した。

なぜ、自分の目で確認してから、スペリングチェックをしたのかというと、作品の中には、英語以外の単語がかなり出てくるので、スペリングチェックで引っかかる単語の数が相当数になるためである。

「ワード」での文章校正機能によるチェックと目視確認が終わった後、各行末のハイフンのついた語を一つの単語が分割されているのか、元々ハイフンのある単語なのかの確認作業をし、テキストファイルでできるように修正を加えた。このような手順で2つの作品を処理し、テキストファイルに変換して保存した。最後に、それぞれのテキストファイルを *TEXTANA* Standard Edition 2.53 で読み込んで、and の使用頻度を調べた。

次に、ヘミングウェイの作品と比較をするために、「小学館コーパスネットワーク」の WordbanksOnline (世界第2の5,600万語の大規模英語コーパス) を使用し、その中の and の使用頻度を調べた。

3. 調査結果

上記の手順に従って、調査した結果は下記の表の通りである。

なお、WordbanksOnline の表の語数に小数

表1 “and” の使用頻度

	and の数	その他の語	総 数
WordbanksOnline	19,496.98 (1.95%)	980,503.02 (98.05%)	1,000,000 (100%)
The Sun Also Rises	2,272 (3.37%)	65,158 (96.63%)	67,430 (100%)
The Old Man and the Sea	1,258 (4.73%)	25,328 (95.27%)	26,586 (100%)

点がついているのは、and の件数が多いために、百万語あたりの割合で表示されたためである。また、*The Sun Also Rises* の総数に関して、この作品の中で、“I’m getting a little sleep.”のように“little”を“little”と分割して表記し、話し手の口調を表現しようとしている箇所が8カ所あるが、それらは、2語とせず、1語としてカウントしている。

この表1を基に、それぞれのテキスト間でのandの使用頻度に有意差が認められるかどうかの検定を行った結果が次の表2である。

この表2より、明らかにこの3つのテキスト間におけるandの使用頻度には、危険率0.1%以下で差があることが分かる。

表3と表4は、作成したコーパスを基に、TEXTANA Standard Edition 2.53を使用し、2つのヘミングウェイ作品における使用頻度の高い単語の上位10語をまとめたものである。どちらの作品においても、andの使用頻度が非常に

高いことが分かる。

4. 分析

表1を見てまず、気づくのは*The Old Man and the Sea*におけるandの使用頻度の高さである。これは、WordbanksOnlineとの比較ばかりでなく、初期の作品の*The Sun Also Rises*と比べてみても、非常にandの使用頻度が高く、表2からも分かるように、その使用頻度には明らかに有意差がみられる。初期の*The Sun Also Rises*でもヘミングウェイの文体的特徴は現れ始めているが、経験を積み重ねていくことで、その文体に磨きがかかっていき、*The Old Man and the Sea*では、詩的とも言えるような見事な作品を完成させたと考えられよう²⁾。

これだけの数のandが実際に使用されているのであるから、ヘミングウェイは、*The Old Man and the Sea*で意図的にandを多用したに違いない。単純計算で、WordbanksOnlineに

表2 2乗検定

	2乗値	自由度	2乗検定結果
WordbanksOnline と The Old Man and the Sea の比較	1,011.932	1	p < 0.001
WordbanksOnline と The Sun Also Rises の比較	637.339	1	p < 0.001
The Old Man and the Sea と The Sun Also Rises の比較	97.939	1	p < 0.001

表3 *The Sun Also Rises* の使用頻度の高い10語

順位	単語	語数	%
1	the	4,452	6.60
2	I	2,323	3.45
3	and	2,272	3.37
4	to	1,585	2.35
5	a	1,538	2.28
6	you	1,177	1.75
7	was	1,159	1.72
8	it	1,150	1.71
9	of	1,116	1.66
10	he	1,087	1.61

表4 *The Old Man and the Sea* の使用頻度の高い10語

順位	単語	語数	%
1	the	2,314	8.70
2	and	1,258	4.73
3	he	1,165	4.38
4	of	544	2.05
5	I	508	1.91
6	it	493	1.85
7	to	454	1.71
8	his	446	1.68
9	was	435	1.64
10	a	397	1.49

出てくる数の2.4倍以上の比率で and を使用している。*The Old Man and the Sea* における and の出現比率が4.73%ということは、ほぼ21語に一回の割合で and が使用されているということになる。

また、表3と表4を見ても明らかなように、それぞれのヘミングウェイ作品の中での and の出現比率は、同じ作品中の他の単語と比べても非常に高いことも分かる。ヘミングウェイの文体を考えると and という単語の重要性は非常に大きな割合を占めると言えるであろう。

5. まとめ

筆者の素朴な疑問の答えを見つけるために、コーパスを作成することにより、統計的手法を用いて、2つのヘミングウェイ作品中の and の使用頻度に関して考察を加えた。結果として、大規模英語コーパスの WordbanksOnline と比較して、それらのヘミングウェイ作品中の and の使用頻度は、統計的に見ても高いということが分かった。また、初期の作品である *The Sun Also Rises* と晩年の作品の *The Old Man and the Sea* では、後者の方がさらに、and の使用頻度が高くなっているということが分かった。調査したヘミングウェイ作品においては、他の単語

と比べても and の使用頻度は高く、文体に果たす役割は非常に大きいと考えられる。

注

- 1) Lodge (1992) は、Hemingway の “In Another Country” (1927) という作品に関して、次のように述べている。「この短い段落のなかで現れる “and” の異様な多さには注目せずにはいられない。一方を他方に従属させることなく二つの陳述を結びつける、きわめて反復的な統語法がこの文章の特徴だが、“and” の数もその表れである。」 (p. 126)
- 2) 亀井 (1998, p. 280), Sanderson (1961, p. 189) 参照。

参考文献

- 今村楯夫 (1979). 『ヘミングウェイ 喪失から辺境を求めて』 冬樹社。
- 亀井俊介 (1998). 『アメリカ文学史講義 2 自然と文明の争い 金メッキ時代から1920年代まで』 南雲堂。
- 齋藤俊雄他 (編) (2005). 『改訂新版 英語コーパス言語学 理論と実践』 研究社。
- Lodge, David (1992). *The Art of Fiction*. (柴田元幸・斎藤兆史訳. 『小説の技巧』 (1997) 白水社).
- Sanderson, Stuart (1961). *Hemingway. Oliver and Boyd*. (福田陸太郎・小林祐二訳. 『ヘミングウェイ』 (1979) 清水弘文堂).